



Title	国民社会の研究 第5巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1959-08-07
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77634">http://hdl.handle.net/2115/77634</a>
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	1008_015.pdf



[Instructions for use](#)

MADE BY YAMATO NOTE CO., LTD.  
USED SUPERFINE POOLSCAP MANUFACTURED IN JAPAN

NOTE BOOK

國民社會の研究  
第五卷

昭和十四年八月七日

富士堂

口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏  
 口氏 口氏 口氏 口氏 口氏

27 23 21 15-6 1

口民の集塊の様態

全口民が一つの社会は統一として具

体好の結果集塊の序の接態に如何。

和口民は家族団を形成して居る。

その家族団が居住を近接して

設けよるに近隣を作り、近

隣同か合して集塊地帯を形成

して片よ。可小落永介ルル存在の

必要のよる皆上層の可小落の

支配下に入り、何故の上層団は

を経て口都に統合して片よ。

口都には全口民の集塊地帯が接つ

かの層に分れて終局して片よ。

1

城つかの

宗族をまとへ一房をたし近隣

とよみ房とたす。近隣の房は城の

かやまとまとへ果ては城とよみの大々とな

房となり。可成りともなつた

集まりへ大々房となり。更にそんな

大々な房が城つかまとへたつた

なる都市を中心へ大房を形成し

かくの如き大房の城つかか口都

せ中に一々大房をたし

片よのた口民をたす。

口民は一々大房をたし生房

の根幹を中心都市においへん。

中心部系の樹木は直下に枝端に  
の影響を及ぼす。近接する隣りの枝の  
葉は余り影響はない。枝端  
の葉は根幹の影響は及ぼさない。  
根幹の影響は直下に枝端まで  
及ぼす。  
日長研究の中心部系は樹木  
ありか。  
根幹が根元、直下に枝葉も枯れる。  
根幹より枝葉より送り出すものは乾  
枯半乾葉である。左の木の直下に  
くわいの下葉、枝葉より根幹の送

よまは中央の生活次第が可なり。然し  
一の枝が送うたか、他の枝が  
送う場合がある。

高田博士の全体文と余の口説を  
 高田博士の全体文は大伴に口説  
 と此の範域を同じくして其よと云ふ  
 か余の口説は存は嚴格に口説と  
 その範域を同じくして其よ。

(大坂大学文学部 創設五十周年記念論文集 一九五八年四月刊行 余の口説の範域を同じくして其よ)



# 北宋の皇帝

口長泥等におり、最大の武力組織  
を有すもの（それを一船の垂穂考）

と云ふが口長泥等なるは口長泥の  
~~保~~ 持するに秩序を維持せしめ

て片は口長泥等が口長泥等なる政治  
である。

口長泥等の組織は古の時代から

出来たもので、新しし、五穂考は

口長泥を甲兵して統治の組織を新しし

く創り出さず仲を以てなく統率ある

口長泥統治組織における五穂考の意

につけはよすである。

故に主権者の治を以て民の治を以て  
成す。よるは有るか、口民統治  
の権能が主権を以て先立つて有るべきか  
常にかうか、口民の治は主権を以て  
先立つて有るべきか、大常の事。  
主権者は其の能くつけは口民を  
統治し得るべきに在るべき。  
口民統治の形式は主権者が新  
己の内に口民に服従を<sup>務</sup>せしめ  
しるべきか、抑も主権者が自ら  
心を盡し過るべきか、抑も  
おぼしきなりしては統治かうま

行かぬ。是は統治者による。

の。主権者は統治は民の為とする。

が。見せかけの事ではない。

漸進的の。主権者は勝手

の。事へなされた。人々を

其の。事。権力者は其の

の。事。権力の民

の人。物の完成と。統治者と

者。事。事。事。

然。主権者。絶対的。武力は。今日

の。政治。事。事。事。事。

了。人が。事。事。事。事。

今口は口家の組織統治の機構  
は他人の前には既に決定されてお  
る。そこで人はその機構の何れか  
の部分につく。その組織の基礎を  
他人の力で受帯するものは強きを  
能くす。他人の前には既に決定  
した所を荒然と取り立てる。こ  
の口の家組織は他人の前にはつ  
有し他人におくかしてはる。言語  
が他人をその中に強制し、隷属  
せしめ、その口家の統治組織  
もそれである。

法務省

に於て

防衛行政の目的は口内外の法秩序の維持に在り

口内外の全般に及んで法秩序の維持に在り

口内外の法秩序の維持に在り

防衛行政の目的は口内外の法秩序の維持に在り

の自利的生活の爲めである

か、口内外の法秩序の維持に在り

文化として存在する程に在り

口内外の法秩序の維持に在り

口内外の法秩序の維持に在り

と云ふに在り

と云ふに在り

措置を考へ

に口内外の法秩序の維持に在り

防衛行政の目的は口内外の法秩序の維持に在り

日本は国民が法に對して法秩序  
の維持に苦心し、武力によつて法秩序  
の擁護を期す。故に、日本  
は武力の総徴候として、國民には  
畏るべきものあり。日本は武力の総徴候  
であるから、日本は日本は野  
蠻な野蠻の國位である。世界に於  
ける日本群は、是れ相互國位  
をもつて、日本人、日本人が長い同人同  
先達の世界である。道徳と文化と  
藝術と宗教と、日本は、その  
であつたか。故に、日本の線は甚だ高

① 古の時代は勿論の事、近代に於いては、その好むや悪むも 多くの  
② 口元は要索の元凶である。その好むや悪むも

持前の死傷となり、附近の村を平服

し、地方の死傷となり、

多くの地帯を冠服、除く、

い、左衛門は多い、

千年の第一般の口元が粗末物居

に甘んじ、加ろス器や金銀の

器具を用い、名をた、

片々古代の遺物、君王の宗族を

か如何に勝手、偏な生かす、

片々か、物、

い、その好むや悪むも

人、回活動が、

響、口元は口ぬの、

が、降人、

世界、口元は口ぬの、

知、口元は口ぬの、

口元、口元は口ぬの、

新、口元は口ぬの、

系、口元は口ぬの、

子、口元は口ぬの、

民、口元は口ぬの、

化、口元は口ぬの、

12

基礎

東洋 村落都市の比較

（日本は有組織の派手な）

西村 一考

家族は動物よりも一層「異同型」

（日本は本業悪党が組織した支配形）

或は「過剰な」基礎  
は村落の都市

（日本は強制下で「片」社会である）

（長が「木」の「作」の「国」の「作」）

（同じくして「支配」が「強制」である）

（日本は強制的に統治して居る不平等）

（この「同」の「人」の「同」の「存」の「存」）

（この「主権者」は「果」に「前」を「後」に）

（相互に「狩」や「狩」の「同」）

（この「道」は「三」に「七」感「小」）

（この「有」は「一」）

（この「上」は「学」学「大」の「口」京「と」階「別」）  
中「高」田「博」の「口」京「と」世「界」の「道」  
徳「丸」教「室」

（日本は武力に「た」つて「武」を「よ」）

（この「村」は「小」武「力」に「よ」つて「言」は「小」）

（武力の上「島」な「組織」は「口」京「と」世「界」）

（地域「の」の「組織」は「口」京「と」世「界」）

（この「と」を「三」に「マ」キ「ハ」の「操」は「小」）

（日本は地域「の」中「に」あ）





契約論と有機体論

多量的の宗論の地位を主張するの宗論

△の宗が他人に是下へ存す。よ

と云ふ有機体論の宗の主張は存方

と云ふ。又△の宗は他に契約

して、あゝ組織である。よし明く

か△の。一切の宗論を予起する。

了り対してはその宗について十分

正當な契約をすればよい。△の

るか。△の。了りて実を考へて

あゝの。はたの。か。天を制し

てたし。△の。①

契約論と多量的の宗論の批判

史実として△の宗が契約に下へて

たを呈する。も明かには現

又△の宗有機体論の物々人為の外に

組織に△の宗が二元性を

△の宗の。△の宗は他人に是下へ存す

思ひに△の宗は是のやいつこの協

△の宗論は契約論である。△

△の宗論は他人に是下へ△の宗が契約

△の宗論は他人に是下へ△の宗が契約

△の宗論は他人に是下へ△の宗が契約

△の宗論は他人に是下へ△の宗が契約

△の宗論は他人に是下へ△の宗が契約

15

◎ 總て口家現物は實際の系

物に終つては現にあるが、その上

に立寄ります。その過志の可

實は先念の断りから、既に

又定いついて、断ります。その

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

口家は既に繋ぎつてあるが、

総合して、其業として、其の他人

は、其の業に甘んじて、其の業に

て、其の業に甘んじて、其の業に

然して、其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

其の業に甘んじて、其の業に

て身。国として人がその地位にある。

よめつ <sup>あ</sup> ~~あ~~ をより有機的協力の行なう。

も身へ <sup>あ</sup> ~~あ~~ の人の地位は皆漸進的

である。 <sup>あ</sup> ~~あ~~ の組織は也・国家的

では身へ <sup>あ</sup> ~~あ~~ と <sup>あ</sup> ~~あ~~ 変容へ国家的である。

<sup>あ</sup> ~~あ~~ 部分の協力は <sup>あ</sup> ~~あ~~ による。

<sup>あ</sup> ~~あ~~ の協力は力の差がある <sup>あ</sup> ~~あ~~ 可能である。

弱い方が <sup>あ</sup> ~~あ~~ 強み <sup>あ</sup> ~~あ~~ する <sup>あ</sup> ~~あ~~ ことである。

である。

多量的に <sup>あ</sup> ~~あ~~ は <sup>あ</sup> ~~あ~~ 価値 <sup>あ</sup> ~~あ~~ である。

の <sup>あ</sup> ~~あ~~ の <sup>あ</sup> ~~あ~~ 部分 <sup>あ</sup> ~~あ~~ による <sup>あ</sup> ~~あ~~ の <sup>あ</sup> ~~あ~~ である。

秩序と <sup>あ</sup> ~~あ~~ の <sup>あ</sup> ~~あ~~ 価値 <sup>あ</sup> ~~あ~~ である。

である。

他の部分に金の上に足踏して片一程に  
考へてはたならぬと云ふ。その意味は  
多量物の考へは正し。然しこの  
（）を云ふは其は其の目的が殊多  
と理解をよまざるや。武力を以てその  
いふよと云ふ特徴の認識が深し。  
又當てお制元をかりしとて同様の  
仕事を継承していふと云ふに多くの  
為陸軍はほんの片のりも忘よのき  
なり。何より弱兵は口家かまつ  
武力の分析のなりなり。  
改ん金係と其のり元は口家

は口内の一切の社会活動の上にあ  
る指揮命令を下す事であると見よ。  
口内の社会活動は、口内の常態に  
所をなるといふ事は、いふまでもなく、獨  
裁を認むに近づくとしても当然である。

秩序の階級の解任は任下は方の  
存な見解がなると案。然し裁断  
と下すのは、結局は武力であるから

武力を以て口内と云ふ事は、  
他の階級の上には、他の階級の上には、  
も、他の階級の上には、他の階級の上には、  
政治

口内が亡ぶれば、復た色

政治の武力の完全分離

この結果が第一。色々の結果が第一  
又これ結果が第一。政治の統制  
が第一。武力が第一。又これ

九月四日 尾崎の  
口を閉ざす

□ 民族は必ずしも他種を凌ぐもの

本邦の政治体制は其の歴史の

民の習俗の歴史の歴史の歴史

其の昔の歴史の歴史の歴史

此の歴史の歴史の歴史の歴史

政治の歴史の歴史の歴史の歴史

□ 政治の歴史の歴史の歴史の歴史

政治の歴史の歴史の歴史の歴史

政治の歴史の歴史の歴史の歴史

政治の歴史の歴史の歴史の歴史

政治の歴史の歴史の歴史の歴史



「哲」の漢字「方」には異つた程の困難  
がせかある。可く先づこれに考慮  
すべきである。

(音) 都悦(つ)て(つ)て(つ)て(つ)て(つ)て  
到達した一つの主張(つ)て(つ)て(つ)て(つ)て(つ)て

口境を越えての団体や同好

市民社会は皆他種別文化を以て但つては活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての団体や同好は、この活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての団体や同好は、この活動の場を定むるに止るべきなり。

形口境を越えての団体や同好は、この活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての団体や同好は、この活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての団体や同好は、この活動の場を定むるに止るべきなり。

一、宗教団体の口境を越えての活動

二、学術団体の口境を越えての活動

三、芸術団体の口境を越えての活動

四、労働団体の口境を越えての活動

五、政治団体の口境を越えての活動

六、市民団体の口境を越えての活動

七、市民団体の口境を越えての活動

八、市民団体の口境を越えての活動

文の口境を越えての活動は、この活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての活動は、この活動の場を定むるに止るべきなり。口境を越えての活動は、この活動の場を定むるに止るべきなり。

この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の

この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の

この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の  
この世のこの世の



ほろつたつのか、治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

治まにす。神治の

本國家の起源の著者井上克貞氏曰く

本人の起源の同じく日本民族の成立とは

であり、そして日本の国家の起源とはまた

別の事柄である。し

出典の原は曰く、領土、統治組織の三つの

要素が成り立つ、といわれるが、曰くも

領土といふ、その意識が成立した

は世界史的にみても十九世紀以後のこと

で、そういうものの要素をさなえた国家

は近代の国家のことである。したがって、曰く

の立とは近代の国家の成立のことである

解すよの大蔵密である。かつて是れが

是者は

近代の家の成立の起源の時上たほとこに

豊くして居よかこ、世界史的には十六世紀の

と云ふか、日本の場合は何時にかんして然る

しなく是よのかこ、

日本の家の起源という場合に、さう考へる

といふことは、口氏・錦工おの経済組織の

考へからなる口氏一すなわち近代の家の成

立はなくて、右に述べた上りな意味にあ

る経済組織の成立はさうな事であらう。この

経済組織の成立はさうな事であらう。この

立はなくて、右に述べた上りな意味にあ

る経済組織の成立はさうな事であらう。この

立はなくて、右に述べた上りな意味にあ

る経済組織の成立はさうな事であらう。この

あし 5-6

石田英一郎氏は日本民族の起源を論じてある

その国のこの最大の人同集團の民族  
は民族ではなく口民族である。また  
口民族の残影が民族である。

論考に民族とは「一定の地域に長期に共同  
の生活を営むことにより、言語、信仰その他  
の種々の文化要素の全部もしくは大部分を  
共有し、同一の歴史と伝統と運命のうちに  
われわれ」という特定の集團の感情  
により結ばれたような人同集團の最大の  
單位である」と述べられている。R.6  
「この十分は肯背である。即ちさうすると、日本  
民族の成立は日本人の起源の同じことより  
も、日本口衆の起源の同じことばかりに密  
接に結びついていることがわかる。日本人が  
たかひに「われわれ」という共通の集團的



る感情をもちつゝ先づつは、皆とてゐるの  
ほつて此日本人が一つの経済揚子のれとに  
組織されはいたる時代より以前ではあり  
てないのである。それだから石田氏もさら  
つづけて「日本のような島国では、日本  
の統一とそれによる交通網の拡大とが、  
比較的容易に各種の地方的な部族群  
を一つの民族にまで融合せしめた」と述べて  
いるのは、すあううなつげとことである。日本  
人の起源が何れは、日本民族の起源と  
いふかえてもよいかもしれなかつた。しかし日本民  
族の成立という事にならば、その場合には

は日本に一つの大きな統治組織の作  
れる時ある。決定的に重要なる意味を  
こころにてあしきり。

井上氏は日本人の起源と日本民族の

起源を日本列島の起源とを分けて考へ

てその考へを最終に整理して居る。

口氏の概念については後の章に述べて居る。

この統治株の中心に統治をけるれたい

いつてもその組織が今日のそれの格に緊密な

ものでなからることもしらるゝてあよ。若しその

統治株の中心に統治をけるれたい國民を、口氏

としての連帯組織や統治の概念をもつてい

たとへば考へられたもの。口説とこの意味は  
領土の範囲がうるべたのは大と云はせ  
警察のような対外的危機にさし入れられた  
一般のにはいやや酷い口の道入といふ  
いふしくなつて江戸時代中期以降のこと  
あまろうし P.5

しかし日本の中核をなす地帯が大部分  
か二つの経済圏のもとに組織づけられる  
のは、それよりずっと前のことなのである。この  
経済圏はその後拡大され、下位の動きに  
従つてその値を変え、時には分裂した。  
しかし大勢として一貫して今にたつてい

のである。』 P.5

「日本国家の起源」という場合には、ふつう

「先づ、小エい」とは、近代の国家の成立

を指すことになり、述べたような意味にはあて

統治組織の出現と、このことである。この統治

組織の成立は、すなわち日本国家の成立

ではない。しかし日本人の「国」を指すとして

日本国家の「国」は、この時点から書かば

「しめいれ」という意味において、それは「天孫

降臨」時代の日本国家の起源を指していること

は、このとおりである。』 5-6

井上氏自著の日本国家の起源(岩波新書)の書評

日本人、日本民族、日本国家、日本国民(種族)の別

井上氏の本著へは、大伴の著書「日本書紀」の別(種族)の別

私の本著とは、その異なりを云ふべきである。

口氏としての著者の意図は、口氏としての著者である。

口氏としての著者の意図は、口氏としての著者である。

である。

井上氏が「概念」の正補を断つてゐる。近縁の

概念として、中味はなしのほ

日本人、日本民族、日本国家、日本統治機構

日本国民、日本領土、

古の法概念の外に、口氏としての概念は、

である。

口氏としての著者の意図は、口氏としての著者である。

口氏としての著者の意図は、口氏としての著者である。

第一、法律上の日本国民の上に形成す

れ、第二、政治的である。日本の統治組織が統

治の對象として居る人の上の記号である。

日本国民を形成する人間の要素は

ふけ、~~政治的~~統一的である。

日本国民の中心は、今アラスカ、ハワイ、

人々である。徳者は日本国民ではないが

日本国民種である。口民は口民<sup>俵野</sup>である。

一、<sup>口民</sup>徳者は日本国民種である。口民は口民<sup>俵野</sup>である。

二、<sup>口民</sup>徳者は日本国民種である。口民は口民<sup>俵野</sup>である。

台湾民族も属する。又、<sup>口民</sup>徳者は日本国民種である。

徳も属する。朝鮮民族も属する。